



梅花女子大学 文化表現学部  
情報メディア学科 玉置好徳教授

7月6日、大阪社会福祉指導センターで市町村社協会長・事務局長を対象に研修会を開催しました。

講師の梅花女子大学・玉置好徳教授は、福祉委員、民生委員、自治会長の三者は地域福祉における『三本の矢』であると説明。

しかし、立場の違いや個人情報等に関する守秘義務といった点からボタンの掛け違いが生じることがあり、三者の連携強化には共通目標を設定することが

## 福祉委員と民生委員の連携強化 市町村社協連合会で研修 ～「福祉情報支援」の視点から～

「我が事・丸ごと」地域共生社会の実現をめざす中、見守り活動や要援護者支援等、これからの地域づくりにおいて地域福祉を支える中心的存在である福祉委員と民生委員のより一層の連携が必要です。府市町村社協連合会(以下連合会)では、両委員の連携強化の重要性を再確認するために研修会を開催しました。

きに誰に相談するか」という質問に対し、「社協」と答えた住民はわずか0・8%。住民が必要な時に必要な福祉サービスにアクセスできる社協の支援体制の確立が必要であると強調しました。

最後に、アンケート等の結果にあるような、福祉の情報住民に届かない現状を打破するためにも、福祉委員、民生委員、自治会長が3本の

矢として連携を強化し、それぞれの強みを生かして住民を支える仕組みづくりを進めていく必要があると結びました。

今年度は連合会として、府民児協連との連携を一層強化することを事業計画に位置付けていきます。

社協の総合力を生かし、地域福祉の中心的存在である福祉委員と民生委員のより一層の連携強化を支援していきます。

続けて、『我が事・丸ごと』共生社会においては、日ごろ福祉に縁のない住民にも福祉問題に『我が事』として感じてもらうことが重要とし、分野を超えた複合的な課題に対して『丸ごと』取り組むことのできる社協の力が求められる、と社協の意義について説明しました。一方、ある社協の住民を対象としたアンケートでは、「福祉で困ったと

災害支援体制の整備に向けて

### 市町村社協災害担当職員会議

in たかつガーデン

府社協は6月30日、府内社協間における災害時の相互支援体制の確認や、災害VC運営等に関する情報交換と協議を目的に担当者会議を開催しました。今回は府内社協のみならず、大阪

ランティアセンター(以下、災害VC)の設置、地域支え合いセンターへの移行と現在の活動状況等について、詳しい報告がありました。

参加を呼びかけ、60人が集まりました。

被災地社協ならではの、時系列に沿った具体的な支援活動と体制整備の話を通して、社協が直面する課題や必要な備え等を学びました。

当日は、昨年の熊本地震のブロック派遣先である熊本県菊陽町社協 事務局次長の玉城清志さんをお招きしました。

参加者からは、「普段のつながりや、訓練がいかに大切かということを実感した」や、「誰も取りこぼすことのない、平時からの地域づくりが重要だと改めて確認できた」等の感想があり、災害VC運営のノウハウとともに、平時の地域支援につながるヒントを共有しました。

玉城さんから、「熊本地震災害での取り組み」と題して、発災直後の様子や避難所運営、災害ボ

頻発する豪雨災害や来るべき南海トラフ巨大地震等の大災害に備え、今後も府社協は市町村社協と協力して、平時からの人材養成や災害支援ツールの開発に努め、災害にも強いまちづくりをめざしていきます。



「地域の「声なき声」を拾いあげていきたい」と語る菊陽町社協の玉城清志さん(右)と渡瀬功史郎さん(左)

# 『子ども食堂 応援プロジェクト』



オリックス宮内財団(以下財団)は、子どもたちが安心して過ごすことのできる居場所づくりの取り組みを府域に広げ、地域で子どもを見守る芽(目)を育てていくことを目的に、府社協と協働して平成28年度から『子ども食堂応援プロジェクト』を実施しています。

これは、地域で子どもの居場所づくりに取り組む地区福祉委員会などを対象に、子ども食堂の開設費や取り組みの充実にかかる経費の一部を助成するものです。昨年度は計6団体に助成を行い、子ども食堂の立ちあげや地域への定着につながるきっかけとなりました。

▼助成を受けた団体のひとつである茨木市耳原地区福祉委員会では、地域活動拠点の『子民家よってこ』を会場に、子民家よってこ食堂を開催。スタッフは主任児童委員を中心に、地区福祉委員や民生委員、また近隣大学と連携し大学生もボランティアとして参加しています。会場は自治会から提供された古民家を改装した建物ですが、

当初は排水処理などの水道設備が十分に整っておらず、以前から子ども食堂を開催したいという声があったものの、設備工事が大きな課題でした。そうした中、財団からの助成を受けることで水道管工事と手洗い場の設置ができ、4月から本格的に運営が始まりました。



「子民家よってこ」の様子

耳原地区福祉委員会委員長の原田茂樹さんは、「子民家よってこ食堂は子どもにとっても、友達を誘いやすい雰囲気になれる場所となっている。今後は宿題を持ち寄るなどして学習支援にも取り組んでいきたい」と今後の意気込みについて話しました。

▼同じく昨年度助成を受けた寝屋川市和光校区福祉委員会は小学校と連携して、家庭科室で調理ランチルームを会場に子ども食堂を開催しています。当校区は次世代の担い手育成

にも力を入れており、スタッフには子育て世代など若手のボランティアも参加しています。校区の見守り活動を行う中で、朝食を抜いたり孤食状態に陥っている子どもの存在を認識。「地域で問題を抱えている子どもは『食育』をテーマに子ども食堂の開設に至りました。

立ちあげの際に財団から助成

を受け、食器棚や冷蔵庫などを揃えることができました。



お洒落な食器棚と食器が揃いました

子ども食堂の中山恵子さんは「福祉委員会にとって助成による設備の拡充は、子ども食堂開設に向けた大

続き、地域で子どもの居場所づくりに取り組む団体を対象に助成を行っていく予定です。

きな一歩となり、スタッフのモチベーションアップにもつながった」と話しました。財団では、今年度以降も引き



住宅街の一角にオープンした「びーの×マルシェ」

の機能を持ち合わせています。地域に出向き、店を訪れる住民と関わることで、メンバーの自信につながります。当日スタッフを担っていたメンバーからは「もともと接客の仕事に興味があった。お客さんと話す機会があることがとても楽しいし、カフェやレジ打ちなどさまざまな体験ができるので勉強になる」といった声があがりました。

市社協の勝部麗子さんは、「引きこもりの方への支援は居場所づくりで留まるのではなく、その先の『出口』をつくる必要がある。社会へのつながりの場とともに就労支援の機会をつくるのが大切」と、引きこもり支援について、社会参加など次の一歩に対する重要性について話しました。

びーの×マルシェ  
がオープン!  
豊中市

市社協は豊中市小売商業団体と共同で、「びーの×マルシェ」を6月12日にオープンしました。

店内には引きこもりの若者の社会参加を支援する「豊中びーのびーの」で作られた手作りグッズや小売商店のお菓子、パン、野菜などさまざまな商品が並んでいるほか、震災復興支援として被災地の名産品も販売しています。

店の周辺地域は、近年スーパーが閉店するなど、買い物困難地区といった現状にあり、新鮮な野菜や惣菜の販売に加えてカフェスペースが設置されている「びーの×マルシェ」のオープンは、近隣住民が気軽に足を運び、買い物ができる場所となっています。

「豊中びーのびーの」メンバーが受けるプログラムには、居場所参加や中間的就労を踏まえた就労体験にステップアップする仕組みがあり、「びーの×マルシェ」はこの就労体験の一環として